

瓊  
克  
拉  
的  
宮  
崎  
晴  
瀾  
編

70  
116

007950-000-5

70-116

瓊克拉的

千頭 清臣/著

M26

AAA-0127



70-116

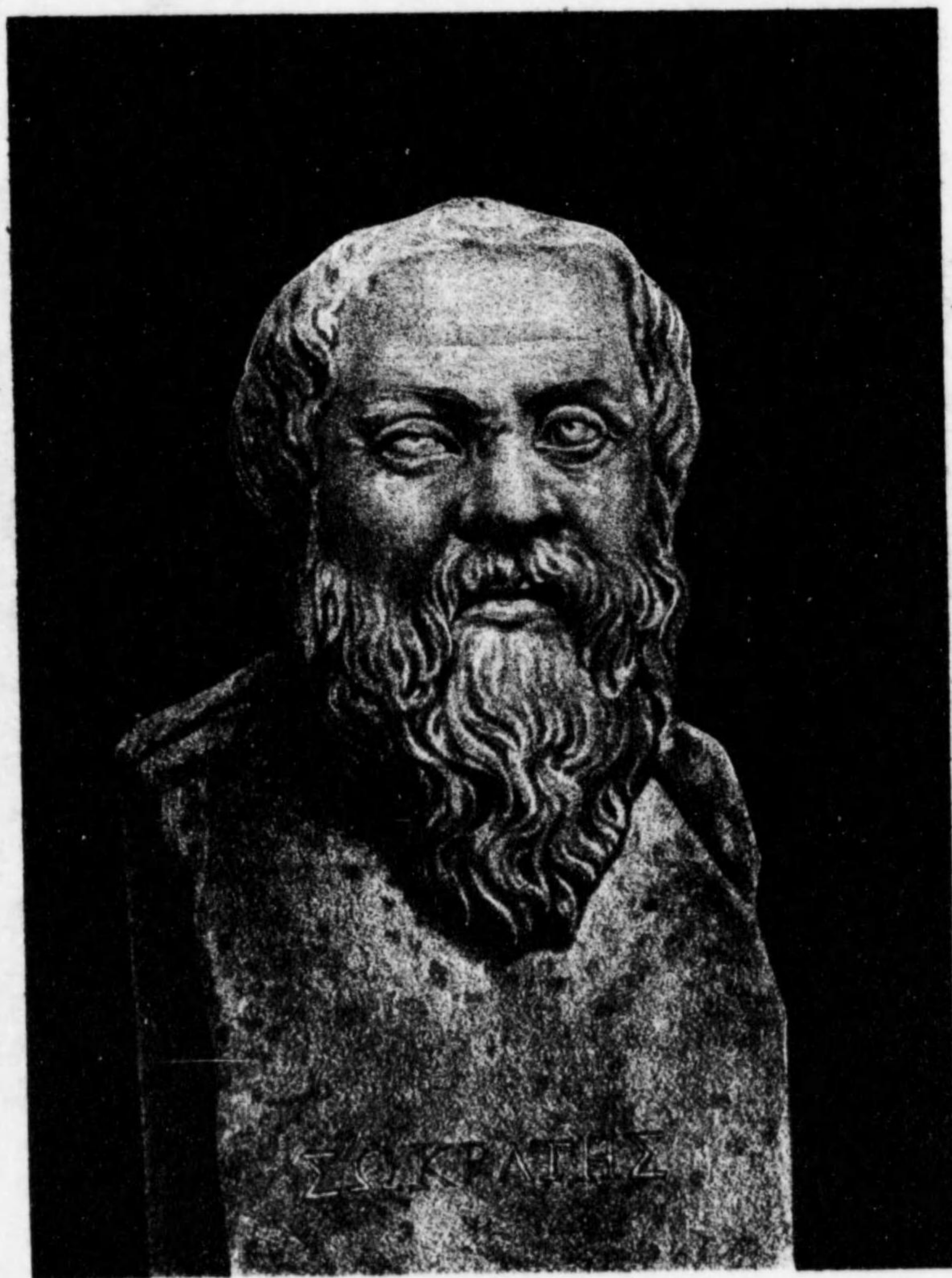
# 瑣克拉的

全

千頭清臣述  
宮崎晴瀾編

東京博文館藏版

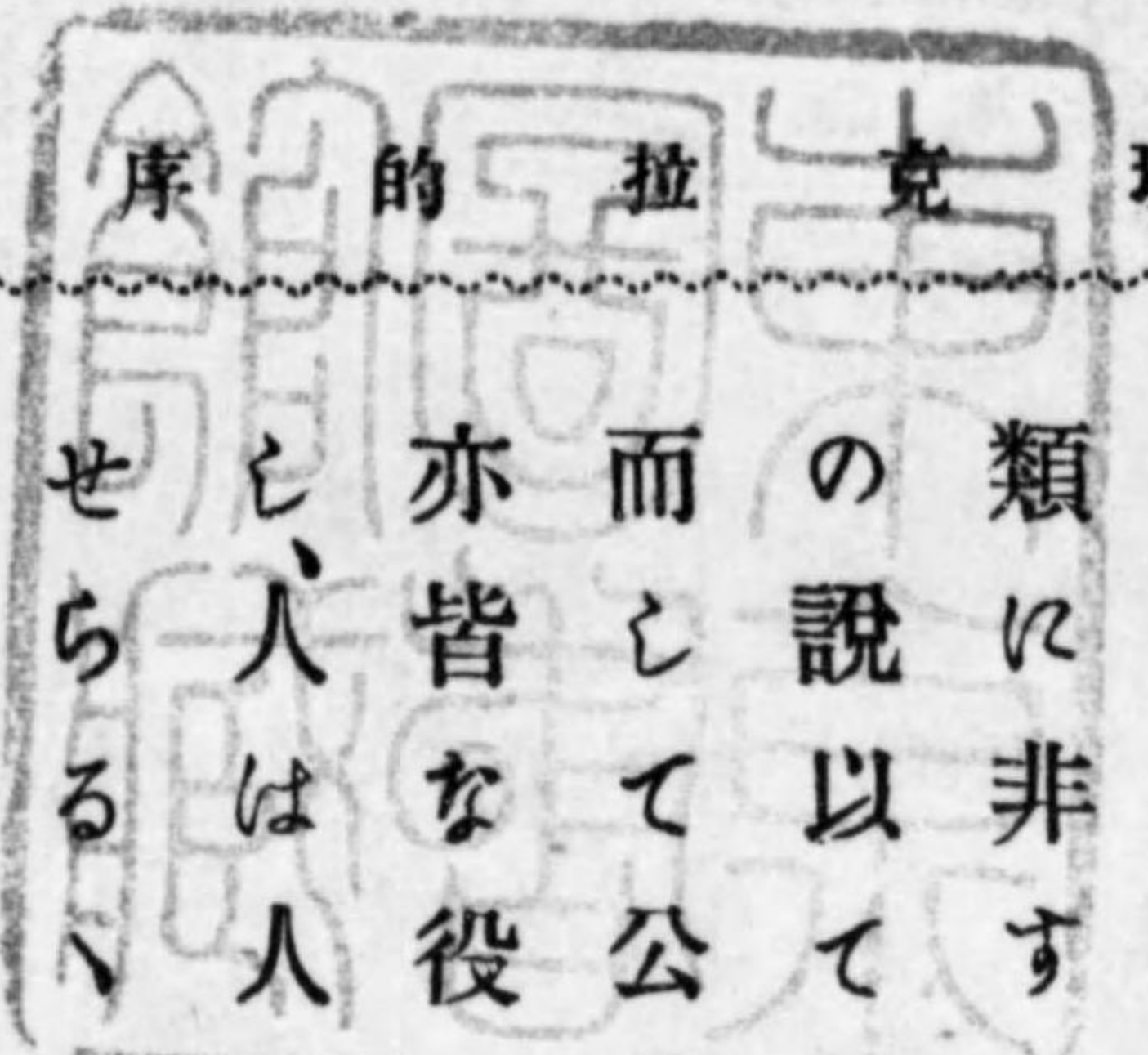




的 拉 克 瑣

瑣克拉的序

瑣氏の教は公義を以て萬善の本と爲す、大にして國役に服し小にして家役に服す、是れ公義の類に非ずや、後世に及び法理財理の學起り、自治の説以て國役を難し、個人の論以て家役を難す、而して公義漸く疑はる、自治の政や個人の制や亦皆な役なきを得る、是に於てか、民は民と相役と、人は人と相役す、役する者異なりと雖とも、役せらるゝ所以に至ては則ち一なり、或曰く、他の強いて役するは我の樂て役せらるゝに如かきと、然り、樂めは則ち家國の役も亦た樂むを得へ



瑣 克 拉 的 序

二  
 ち、其の公義たるを信すればなり、今や私を先に  
 して、公を後にし權利を右にして、義務を左にし、  
 曰く人生の自然なりと、苟も然らば役皆を樂む  
 へきに非ず、役皆を樂むへきに非るか、吾復た衆  
 と共に生息するの地なけん、夫れ虚理を以て斷  
 せは家國ある者甚解し難し、實利を以て算せは  
 公義なる者亦た盲信のこ、吾に自然の權能あり、  
 此の權能を以て吾の慾を充たす、吾の自由なり、  
 君相何者ぞ、父兄何者ぞ、家國民人何者ぞ、敢て吾  
 に役を命ざるは、僭に非れば則ち暴のこ、是の故  
 に、克く役を免るゝ者は智人と稱せられ、公を説

三  
 き義を行ふ者は愚人として笑はれ亂人として  
 斥けらる、瑣氏の如きは愚人か亂人か、貧に安ん  
 じて富を求めず、國に役せられて功を思はぬ、妻  
 に侮られて怒らす、友に嘲られて憤らぬ、世を舉  
 げて我を棄つるも我敢て世を棄てず、罪かくし  
 て獄に繋かれ而して其冤を辯せず、諄々として  
 道を説き死に臨みて渝らす、厚く公義を信する  
 者に非れば焉ぞ克く此に至らん、吾聞く、社會進  
 歩の本は人に在り人の生は其の慾を充たすに  
 在りと、名を求むるか樂を求むるか將た利を求  
 むるか、瑣氏の如きは言行皆を非なり、社會進歩

の道に反する者に非すや、然らば則ち以て今の世に師とするに足らず、友人千頭清臣君は教育家なり、瑣氏の傳を評賛して以て其の徒に授く、宮崎晴瀾氏文にして將に之を世に公にせんとす、吾其の意を解せず、然りと雖とも、一言する所以のものも亦た樂て友人の役に服するのこゝ、豈に敢て公義と曰そんや、

明治二十六年夏

羯 南 生 識

凡 言

一千頭清臣先生曩に鹿兒島造士館に在り去るに臨て館中の青年を集め希臘の古賢瑣克拉的氏の事を語りて別と爲す先生已に東上一夕余に話するに亦た此事を以てす余之を聞て竊に讀十年に勝るの感無くんは非す因て退て之を筆綴す此の小冊子は即ち是あり。一余の此編を草するや全く先生一夕の對話に由ると雖も又妄に自己の所感を附して之を敷衍する者無きに非す加ふるに文字陋裂之

を以て先生の好話を録するは自ら顧みて兼  
 葭倚玉の情に堪へず蓋し讀者は即ち一見し  
 て之か玉石を辨せん。  
 一此編の成るや先生急に起て高知中學に赴き  
 遂に其の校閱を経るの暇無し則ち卷中の疵  
 瑕は皆な余の不敏の致す所なりと云ふ。

明治廿六年六月廿七日

自由新聞樓上に於て

宮崎晴瀾識

瑣克拉的目次

第一回 ○概言○英雄崇拜……………一  
 第二回 ○瑣氏の出生○幼時○談話力……………一八  
 第三回 ○排慾○奇癖……………三〇  
 第四回 ○デルファイ塔の神示○問答……………四五  
 第五回 ○萬民の師○感化……………六〇  
 第六回 ○罪案○辨護○審判……………七〇  
 第七回 ○死……………八九  
 第八回 ○餘言○輿論○學者……………一〇三

# 瑣克拉的

千頭清臣 述

宮崎晴瀾 編

## 第一回

○概言 ○英雄崇拜

世。1。英。雄。の。特。出。す。る。は。猶。ほ。山。1。泰。山。の。高。あり。  
 水。1。黄。河。の。遠。あ。る。か。如。き。乎。泰。山。1。登。り。て。而。し。  
 て。天。下。を。小。と。す。る。を。知。ら。さ。る。者。は。固。よ。り。以。て  
 英。雄。の。事。業。を。語。る。1。足。ら。ず。黄。河。1。泛。て。而。し。て  
 百。年。河。清。の。期。無。さ。を。解。せ。さ。る。者。は。又。た。以。て。英



雄崇拜の由來已むを得ざるゝ出つるを言ふゝ  
 足らざるあり、見すや、泰山高く白雲の外に抜か  
 は、齊魯未了の衆青は、相趨て之ゝ朝せざるを得  
 す、黄河一下大地を畫斷せは、衆流の細は勢ひ之  
 ゝ注て以て其大を加ふるゝ過ぎす、故ゝ英雄崇  
 拜は事實あり、理論ゝは非す。  
 現時ゝ當りて英雄崇拜を非とするの議論は、最  
 も進歩したる思想として迎へらる、然れとも徒  
 らゝ高さを力むる理論を作して、以て進歩した  
 る思想なりとして迎へらるゝことを得は、世ゝ

帝王の尊を無視し、國家の構立を無視し、人類の  
 才能を無視する者は、豈ゝ更ゝ一段の新思想を  
 るか、何とかかれは則ち人類の才能を無視するゝ  
 非すんは、彼此の優劣を認めざるを得ず、彼此の  
 優劣一たひ成らば、服従の義は自然ゝ生ず、況ん  
 や帝王の尊を認め、國家の構立を認めなは、服従  
 の實は益々生ず、此の如くゝして英雄崇拜を非  
 とするの思想は、終に其の根據を之ゝ奪はれさ  
 るを得ず、蓋ゝ英雄崇拜とは、亦た劣者の優者ゝ  
 對する必至の結果を言ふのみ、何を必ずしも衆

Socratic method

るは紛然たる騷擾ならずや、去ればカーライル、  
 かる者の徒出つ、公然筆を執りて曰く、天は斯民  
 を指導せむめんか、爲めに英雄を下す、英雄は天  
 の命する所、斯民の之を崇拜するは神契とて  
 犯すべからずと、此も亦た焉そ一端、激し來る  
 非らざる無きを知らんや、其の之を謂て彼は  
 多數人民の存在を遺却し、人類綜合的の生活を  
 忘却する、個人を知て人類を知らざる者と難せ  
 しマシニ一の如きは、惜ひ哉、終りカーライルを  
 知る者、非らざるなり。

愚の牛馬相率ひて以て英雄の膝下、隷屬する  
 の謂ひのみなる可けんや。  
 物相ひ打て交互其の端、激し來る、俱し其の中  
 準を失するは免る可からず、夫の純一ある自由  
 平等の談、容易し歐西の天地、瀾漫せしは、疑ひ  
 もなく英雄崇拜の濫用、一時人類牛馬の慘し激  
 し來りしを知る可し、英雄崇拜の濫用は、則ち人  
 類牛馬の禍を醸す、而も自由平等の濫用は、則ち  
 終り果して何如そ、蜘蛛網を徹して大地を翔け  
 る、彼等憫む可きは己に適從を失せり、剩し得た

入門の處は何れの途を、今は只た知る、若し自由  
 平等の説よして或る眞理を含蓄するを得は、英  
 雄崇拜の論、亦た均しく一種の眞理を有するは  
 疑ふ可きよ非らざるなり、然れども二者供よ兩  
 端よ激し來る、其の理論として缺裂の觀を免れ  
 さるは、毫も軒輕するなし、愚なる哉、世の雷同を  
 以て事とするの輩、先覺經時の眞意を察せず、漫  
 よ祖を掲げて可否を言ふや。  
 夫れ萬人一色の面を具し、萬人一色の心を具し、  
 萬人同じき形軀を備へ、同じき生活を營み、以て

同じき壽命を送るあらは、人類の至幸恐らく此  
 よ若かさる可し、只た十人十色、其心の異なるは  
 其面の異なるか如きを奈何せんや、是よ於てか  
 智愚賢不肖は端なく來る、而して智なるは少く  
 愚あるは多く、賢なる者は稀に不肖者多く、悲し  
 むへきは社會の大半、實に愚物を以て填充する  
 よ非すや、世よ前識を彙して學問なる者の之れ  
 有るは、以て衆蒙を啓く所以なりと云ふと雖も、  
 由來學問の光明は、暗夜燭を樹つるよ等しく、光  
 芒尺よ及は、暗處尺よ始まり、光芒丈よ及は、

暗處。又。た。丈。一。始。まり。其。の。明。を。及。ほ。す。の。多。さ。一。  
 從。て。而。し。て。益。々。暗。處。の。廣。さ。を。加。ふ。る。は。抑。も。之。  
 を。如。何。す。へ。き。や。或。は。教。育。な。る。者。の。之。れ。有。り。て  
 夫。の。學。問。な。る。者。と。形。影。を。相。爲。す。を。恃。む。あ。り。と  
 雖。も。明。暗。の。廣。狹。は。依。然。た。る。の。み。否。な。依。然。た。る  
 一。非。ず。暗。處。は。復。た。殆。と。相。倍。蓰。し。て。行。か。ん。と。す  
 る。な。り。不。肖。者。は。十。九。世。紀。の。鐵。及。ひ。氣。力。の。間。よ  
 り。醞。釀。し。來。れ。る。幻。影。を。望。て。所。謂。る。文。明。開。化。な  
 る。用。語。を。取。て。直。一。社。會。の。圓。整。を。意。味。す。か。如。く  
 一。考。ふ。と。雖。も。此。れ。誤。謬。の。思。想。か。り。現。一。認。む。へ

きは其の鐵走り氣力進ると共に、人類の缺陷亦  
 た甚しきを致し、智者愈よ智、愚者愈よ愚、富者愈  
 よ富、貧者愈よ貧、以て優劣の競争は、日に酷烈な  
 らんとするを示す一非ずや、是の時一當りてや、  
 高誠の偉人率先して疾呼指導の勞を盡くさん  
 とするも、萬衆視聽を一よして崇拜の勢を添ゆ  
 る無くんは、人類の其の排列を誤らさる者、眞に  
 幾何そ、彼を思ひ此を考へなは、單如たる推斷一  
 基きて萬人一視の理を極張し、以て劣者が優者  
 一對する自然の義を忘る、一至りては、果して

之を人類の本相を得たりと爲す乎、惟ふは理相  
 ひ奪予す、威徳是れなりとは、恰も韓非か吾人  
 示すの至言、所謂る理相ひ奪予する威徳とは、此  
 れ英雄の士が偶然發揮し來る所の感應ならず  
 や、今ま之を崇拜す可しと曰ふは、亦た是れ究竟  
 人類必至の結果は基きたる事實の表彰のみ、理  
 論は非す、然かく理論は非すと雖も、吾は則  
 ち明かす此れが事實を是認するを憚らざるな  
 り。

何を以て言ふや、今日に至るまで仔細は人類經

營の跡を案すれば、上は帝王の尊より、下は一郷  
 一閭の長、一家隣佑の間を通じて、孰れか交互の  
 服従行はれざる、極端なる自由平等も、裏面より  
 して視は、亦た孰れか人物服従の間は運用せら  
 れざる、大にして而して之を見る可し、英雄崇拜  
 は己むを得ざるなり、而も其の己むを得ざる所  
 以の者は、一たひ之を破壊せば、人類の排列は響  
 然瓦解し、復た群を作し團を構ふるの途無きに  
 迷ふなり、此の事實よりして英雄崇拜は、或る制  
 限を加へて以て人類一種の道德として理解す

るよ足るなり、若し然らすとするも、英雄の師父  
 たり益友たるは、毫も疑ふ可きよ非す、之を崇拜  
 するは、吾れ是認して愧ぢす。  
 然りと雖も、英雄も亦た一ならず、之を崇拜する  
 よ於てや、自ら識別無かる可からず、識別一たひ  
 失すれば、英雄崇拜は適々以て屈を招くよ足る、  
 眼明かならざるは、英雄よ非らざるなり、情摯か  
 らざるは、英雄よ非らざるなり、古今を貫くの直  
 覺無きは、英雄よ非らざるなり、死生を破るの赤  
 心無きは、英雄よ非らざるなり、明眼は直覺と相

ひ待て理を審よし、赤心摯情と相ひ鼓して事よ  
 當る、英雄の本事此よ畢る、所云る英雄も亦た一  
 ならず、識別の要點は此に存す。  
 人を殺すか爲めよ人を殺す艸の如く、萬骨を賭  
 して乾坤を一髪よ弄す、世不幸よして之を英雄  
 と呼ぶ者あらは、吾は斯かる英雄を悲しむなり、  
 時勢は必ずしも英雄を證するよ非す、而して英  
 雄必しも時勢を造る能はざるよ非す、後者は  
 以て眞英雄たるを必ずと雖も、前者は時よ豎子  
 をして名を成さしむることあるを免れず、豎子

跳梁、久しひ哉、偶運を誣ひて己か手腕は歸す、世愚よして之を英雄と呼ぶものあらは、吾は斯かる英雄を鄙しむかり、夫れ吾の識別せんと欲するは、亦た只た明眼のみ、摯情のみ、直覺力のみ、赤心のみ、故に王者の冠を拾はずして、太平洋岸の大共和州を創基せし華聖東氏の如きは、豈に眼明かなるの英雄は非すや、萬古の性靈を黼黻しては、涙の磅礴する處、和氣の軒騰する處、滿志踟躕、引て金石は發す、ダント、シェークスピア、李青蓮氏の如きは、豈に情火中の英雄は非すや、豫言

者としてマホメット氏あり、吾れか所謂る古今を貫く直覺力とは、此種の英雄は待つ、宗教家としてルーサー、ノツクス氏あり、吾れか所謂る死生を破る赤心とは、此種の英雄は完し、由來英雄も亦た一ならず、吾の崇拜せんと欲するは、先づ此の識別に訴ふなり。  
 今ま一人あり、貌揚らざるなり、軀幹偉なるにあらず、鼻天は朝して腹前は突す、髯蓬蓬として襟褸身は纏ひ、糟糠飽かす、竟に毒は遭ふて死す、此の如きのみ、彼れ劍戟を手よして馬背に上ると

雖も、邦境を拓開せしは非ず、彼れ詩客を辨屈し  
 て時は高歌するありと雖も、自ら一韻を賦せし  
 は非ず、彼はマホメットの豫言なり、又タルトサ  
 ー、ノックスの説教なり、然れども其の眼の明か  
 なる、其の情の摯かる、直覺の鋭、赤心の壯は至て  
 は、殆ど吾を以て夫の四種の雄は、或は此の一人  
 の分身は非らざる無きかを感じめんとする  
 もの、あるなり、吾は之を畏敬し、之を崇拜す、嗚呼  
 此れ吾が希臘の眞英雄、瑣克拉的氏の事を語ら  
 んど欲する前言のみ。

國分青崖賛曰。

日月爲心。宇宙爲胸。言出金石。發味啓蒙。  
 汪洋溟渤。巍峨泰嵩。英之又英。雄之又雄。



## 第二回

○瑣氏の出生 ○幼時 ○談話力

噫英雄は夫れ國の生命なる乎、封域の大之は與らざるなり、民人の衆多之は關せざるなり、何ぞ希臘の地中海岸に在る一小國を以てして、其の國運の蒸蒸日上、其の時を當りてや、偉人踵を接して起り、雄者は以て豪を拉し、豪者は以て秀を勵まし、秀者は以て草靡して起つ、聖と稱する者、賢と呼ぶ者、或は君子人、或は豪傑漢、技術は理學、政治文學哲學、一として光燄活氣を帶ひさ

る無し、ホーマーの詩を以て混沌は崛起するあり、ヘロドタスの史を以て草萊を拓開するあり、雄辯家の泰斗としてデモッスセニースを仰ぎ、思想家の巨擘としてアリストートルを推す、ペキユリースの政治、エバミノンタスの兵法より、以てアレキサンダーの大王に至るまで、其間凡人材と稱すへきは、眞を得て車量すへからさるなり、此の如くにして當時に在ては、隱然全世界は雄視し、猶ほ千百年の久しき長く開化の泉源と呼はるゝもの、此れ偶然の事ならんや、國小

して民人寡し、苟も英雄の能く國の生命たるま  
非らざるより、國小の適く以て自屈し、人寡の  
益く以て逡巡し、彼れ希臘の吾れ早くも波斯王  
の饑涎ま葬られしを知らんのみ。  
吾れ語らんと欲する瑣克拉的氏の、亦た實ま希  
臘の人、而して希臘諸賢の中ま在りて巖然第一  
流を占むるなり、然れども瑣氏の眞英雄たるこ  
とを語らんま、頗る庸俗を充たし難きに苦し  
む、何をや、庸者の目を以て見る、瑣氏の目を以て  
見るを得べき英雄からど、俗子の血を數へて雄

豪を判す、瑣氏の血を數へて判し得べき雄豪な  
らど、已む勿くん、涙乎、汝か目を以て見んとす  
る所以の者を轉じて汝か涙ま訴へ見よ、汝か血  
を數へんとする所以の者を轉じて更ま之を瑣  
氏か涙ま問ひ見よ、夫れ涙は眞靈の宿る處、此れ  
ま非すん、以て瑣氏の至高至大の眞英雄たる  
を解識するま足らざるなり。

抑も此の至高至大なる巨人の健氣ま貧しき  
彫刻師を父とし、憐むべき産婆を母とし、紀元前  
四百六十九年雅典府の塵の内まを生れ出てぬ、

父彫刻師の名をソフロニカスと曰ひ、母産婆の名をフヒーナレットと曰ふ、思へば此の父母の何如にして瑣氏を教養せしや、只た辛ふして普通の教育を與へしのみと傳ふるは過ぎず、偶々雅典の富人クリートなる者、大に其の非凡に驚き、竊に賞を與へて父の工所を逃れ、以て哲學の端緒を學べしめたりと云ふ、瑣氏幼時の状、其の傳ふる所纔に此に止まり、復た詳ならず、要するは幼時の教育の頗る不充分なりしこと、想ひ遣る可きなり、殊に知らず、彼れ何を以て至高

至大の素を養ひ得しや。

瑣氏の生長せり、將に其の至高至大の人と爲る第幾壇に上らんとするなり、然れども至高至大の人、初より坦坦の平途あり、彼の悠然として進む、自ら逼らざるなり、故に水立ち山飛ぶの壯觀無しと雖も、日動き月轉する常操を失せず、強て耳目を驚かさんものを求めず、其の容貌舉止の奇且つ怪なるを説くは若くなく、蓬蓬として轟なるは其髯なり、漠漠として廣きは其額なり、鼻の上は捲て而して平に、腹の前は突して而

して張る、面大に唇肥へ、忽ち歩み忽ち留まる、歩む時は空しく歩むあり、留まる時は空しく留まるなり、而も頻りに眸を揺して回視す、徒跣泥沙を擇はず、敝裘襪褸の如し、凡そ小丈夫に在て之を視は、奇なり怪あり抑も又醜の甚しきなり、而して今ま人をとて其の纏ふ所の襪褸は、却て錦繡よりも輝き、面貌の莽醜も、猶ほ大理石よりも美なるを想はしむるは、此れ豈に中にも包む處の皎皎炳炳たる者を以てし非すや。

然れども瑣氏か著しく人にも異なるは、獨り其の

形貌に於てのみならず、殆と又た庸衆か瑣氏の形貌舉止を見て、大に奇異の念を發するか如くは驚嘆を爲すものあり、其の談話の巧妙なること、是れなり、蓋し瑣氏の舌端には絶大の威靈を寓し、人あり之に向はゞ、智も爲めし奪はれ、勇も爲めし碎かれ、嫉妬偏癖迷頑陋執等、此等無數の悪徳は立ろし一掃し去られて、只た天地の最善は浩浩として眼前に顯れ出づるか如くならずんは非ず、瑣氏か一世に木鐸して、萬人を感化せし功德は、實に此の談話の力、與りて大なりとす、

當時政治家の一人なりしアルシバヤダースは  
 曰く、瑣氏の聲は金石より發するか如く、之を聽く  
 琅琅たる天樂に對するか如く、覺へず邪思を拂  
 ひ、殆ど終に恍惚とて自ら知らざるに至る、去  
 かきだよ余は平生毫髮の悔念無し、又た毫髮の  
 恥感無し、而も一たび瑣氏の談話を耳にすると  
 及ては、油然として、悔悟を發し、廉恥を感ず、余は  
 復た人と相話して、之を爲せ、之を爲す勿れと云  
 へるか如き感情の催ふせしこと無し、而も瑣氏  
 と話するよ及ては、忽ち斯かる感慨は胸より

芽して止まらずと、因てアルシバヤダースは更  
 喟嘆して曰く、余は瑣氏の談話を避けんを要す、  
 若し已む無くんは耳を掩ふて早く逃れ去るを  
 要す、何如よとなれば余か耳一たび開かば、余か  
 心魂は亦た余か有し非ず、恍惚の極、余をして老  
 殺せしむるを怕るればありと、ユウークリッヅな  
 る者あり、雅典を距る廿里許メガラに住す、傳へ  
 言ふ、當時故ありてメガラの男子は、雅典より入る  
 を許さず、之を犯す者は、即ち死し處するの事あり  
 りと、而もユウークリッヅは瑣氏の教を乞はんか

爲めに、危くも廿里女装して數々雅典に走れり  
 と聞く、亦た以て瑣氏か談話には、絶大の威靈寓  
 して、眞に人をして須臾も得て堪ゆる能はさら  
 じめし者ありしを知る可し、夫れ之を以て徒を  
 從へ道を講し、出て、衆を導く、元惡回へす可し、  
 凶頑翻す可し、而して何物の木石か陋として動  
 かす、却て之に仇せんとするに至るや、蓋し此に  
 到らすんは瑣氏の至高至大は容易に窺ひ難き  
 は、是非無し。

國分青崖賛曰。

低鼻突胸。亂髮蓬蓬。襜褕不蔽。此何奇童。  
 容醜心美。齡幼德崇。一鄉欽名。千里化風。

## 第三回

## ○排慾○奇癖

英雄の神威の萬慾を排して成る、夫れ慾とは何  
 そや、濁濁沌沌たる毛骨血肉の間に蟠る無数の  
 悪魔なり、不幸にして此の悪魔や、吾人が父祖か  
 曾て甘して妖蛇の欺く所と爲りて、天より償ふ  
 所なりと傳ふ、其の魔力の思議すへからさる、若  
 かく父祖すら之に降伏す、則ち誰か能く千百年  
 の後、眇たる苗裔を以てして翻然崛起、以て乃祖  
 か克くする能はさる所の舊債を擲て天の傍に

は坐する者ぞ、吾れ崇拜して語らんと欲する希  
 臘の瑣克拉的氏は、確に其人なり、故に瑣氏の言  
 に曰く、尤も慾望の少きは、最も神の道に近き者  
 なり。と、而して瑣氏は則ち尤も慾望の少き者、否  
 な彼は殆ど萬慾を擲ち去れり。  
 誰か曰ふ、英雄は色を好むと、色を好むとは飽く  
 まて美人を憐むの意か、是れ已に肉中の悪魔に  
 降伏する者のみ、夫の瑣氏は則ち畢生冷然とし  
 て顧みず、誰か曰ふ、大塊肉を喫し大椀酒を食ふ  
 は、亦た豪傑の徒なりと、是れ已に口腹中の悪魔

に降伏する者のみ、夫の瑣氏の如きは、豈に啗た糟糠すら飽かざるのみならず、彼は實に時々斷食を、絶飲す、曰く、余れ戰場に臨むの用意なりと、人あり胃を病む、嘗て瑣氏を見て、何如して之を醫するかを問ふ、瑣氏曰く、汝斷食せよ、汝絶飲せよ、汝業に就け、其人驚て走る、富者の食に驕り衣に奢るは、何れの世と雖も然るか、其の口腹飢寒の悪魔に降伏すと云ふか如き、固より斯かる丈夫らしき言語を以て、之を彼徒に責むる所以には非すと雖も、彼れ牛を屠て食ふ、己れ游逸何

の爲す無きに顧みて、少くは牛に愧ちさるか、彼れ蠶を奪て錦繡を纏ふ、己れ何の職業無くして安臥するを顧みて、少くは一微蟲に慙ちさるか、實に怖ろしきは花田の妖蛇にぞある、夫の瑣氏は則ち嘔惑して曰く、彼等は食はんか爲めに世に生存す、余は生存せんか爲めに食ふと、故に瑣氏の粗食は言ふへくもあらず、彼は容易に酒を下さず、只た時至らば大飲せざる無きに非すと雖も、玉山は蠱として頽れず、曰く、心靈を雲らすは愚なりと、夏寒共に一衣、嚴冬氷凝らは、徒



跳之を破て脚力を閑す、遇ま市を過ぎて店頭の  
 品を窺ひ、熟視して曰く、皆か俳優場に上るの具  
 のみと、貴人は千金筵を張て蝴蝶相ひ戯る、瑣氏  
 は獨り家より躍る、曰く、余れ運動すと、朋あり三兩  
 門に見ゆ、瑣氏の招きに應へ來るあり、妻は起て  
 甲斐くくしくも之を座に延き、最も悦はし氣に  
 何より角と周旋して、主客の對話を聞き取り居り  
 くに、稍く少焉らくするや、俄に不満の色を帯ひ  
 て厨後より出て來りぬ、厨は空野なり、一菜を見  
 ず、枯海なり、一鱗を留めず、斯くては何を以て今

日の佳客を饗すへき、妻は狼狽せり、思へは俎刀  
 の事自ら賤妾の任なりと雖も、抑も之を水濱よ  
 問ふは良人の責からずや、不満の情は益々動き  
 ぬ、良人は冷然たり、曰く、殘漿冷飯を拾ひ來れと、  
 妻は猶ほ逡巡するあり、良人は再ひ面前の客を  
 も併せ諭すかの如く、最も温なる笑を漏らし、て  
 曰く、今日の客は余れを見んか、爲めなり、余れを  
 見んは余れと共に天地の眞理を味はんか、爲め  
 かり、食はんと共に非す、飲まんと共に非す、客若し頭  
 を掉らは、余れも亦た門前に衣を振はんのみと、

客は憚ひすして去りしか、抑も首肯して出ていか、日月は之を轢滅して、獨り瑣氏の光明を存するのみ。

山中の賊を破るは容易、心中の賊を破る大に難しとは、善ひ哉、此語馬上に發す、想ひ起す、瑣氏楯に仗て戰陣に在るの日、彼は最も意義ある一つの事蹟を示せり、否な庸人は殆ど其の奇且つ怪に絶倒せんとせるなり、一日瑣氏は飄然として幕を出て、暫らくは營外逍遙の游を爲せしに、已よして忽ち一處に止まり、乍ち立ち、乍ち思に沈

みぬ、適く人の之を認むるあり、時恰も午天、其人怪て而して營に入る、既に夜深、瑣氏返らざるをり、其人往て之を窺へは、依然として暗中に直立するを視たり、益々怪て而して返る、翌早起、其人曉を犯して往て之を窺へは、瑣氏猶ほ依然として舊處に露立す、已にいて旭日は蒼蒼涼涼の外より約を違へすして來る、瑣氏仰き見て、始めて莞爾拜笑、再揖して去る、而して其の傍人は則ち絶倒して營に入り、衆前之を哢談して已まさりしと云ふ、吾れ因て嘆す、瑣氏默立の間、其の所謂

る毛骨血肉の裏に蟠る人類限り無きの悪魔を  
殺し得し者、真に夫れ幾何ぞや、指旭拜笑、是れ殆  
と其の凱歌を示すにあらすんは非ず、彼れ獨り

山中の賊を知る者、吁未た之を解せず。

且つ夫れ英雄には喜怒無きなり、其の之れ有る  
は人の喜怒を發するなり、喜怒の人を發するは  
非ず、古へも亦た云へることあり、情を人の種に  
鍾ると爲す乎、抑も人を情の種に鍾ると爲す乎  
と、英雄に喜怒無しとは、殆と又た是の秘鑰中の  
消息なり、豈に淺人の識る所ならんや、天は蒼蒼

と。して自ら靈を爲す時に、雷霆霹靂の威を示さ  
すんは、庸者は乃ち其の靈を疑ふ、天の已むを得  
ざるなり、英雄の喜怒安そ、天の眞意なる可けん  
や、故に古へも亦た云へることあり、君子は雷霆  
霹靂を聽きて驚かす、白日青天に惕然を加ふと、  
殆と夫の至人よして而して後ち喜怒を忘るゝ  
乎、吾れ是を以て瑣氏の至高大を知る。

瑣氏嘗て客と論議す、客辭屈し、悍然起て瑣氏の  
面に唾す、瑣氏徐ろに曰く、議論は枝葉に涉らん  
とせり、客且つ坐して其本に返れと、一日雅典の

市を徘徊す、悪戯者あり、巨棍を舉げて瑣氏の背を撲つ、瑣氏知らざるか如し、傍人爲めに切齒して曰く、何を鞭たざる、瑣氏静ま答へて曰く、驢馬を蹴る、汝は驢馬に怒る乎、妻ザンナープ憫むへき痲痺を有す、瑣氏適く家に在りて事を執る、妻之よ言ふ、瑣氏應せず、數くして初の如し、妻吼へ去り、俄に井水を桶に盛り來て、瑣氏の頭面に被らす、瑣氏平然として曰く、ザンナープは曩に雷鳴を作せり、今ぞ雨降るならんと思ひ居りしに、疑ひもなく、雨は降り來れりと、妻爲めに呆絶す。

人奇ならされは則ち清ならず、癖ならされは則ち淨ならず、清淨法門、由來奇癖性中の人、而も此時去て瑣氏か戰場に奮闘する状を見よ、亦た何そ其の可憐あるや、彼は實に三たひ國命に由りて戰場に赴けり、而して其の初度の戦の如き、軍會の決議は、瑣氏に與ふるに勇氣の感狀を以てせり、瑣氏は之を辭せり、辭して之を年少のアルシバヤデースに譲りて、其の前途を勵ませり、然れども戦鬪の勇、半はアボットか所謂る獸物の

氣たるに多し、豈に之を至清至淨の瑣氏の爲めに言ふに足らんや、夫れ至勇は眞靈に宿る、リヨンある者あり、罪ありとして將にサラミスより、雅典に召致せられんとす、此の使命を蒙りては、瑣氏と共に四人、而して瑣氏獨り肯んせすして之に抗す、其の罪に非らざるを知らはなり、嘗て元老院五百人會は、一日瑣氏をして議長の順番に中らしむ、此日一大問題は全起せり、是より先き、我水軍の大將は、アーギニユシエーの戰酣にして猛風暗雨の亂れ打つに會ひ、波高く船立ち、

屍を收むること能はず、已む無く之を副將に命じて、躬も先つ國に復命を、國人激怒、其の親しく屍を收めざるを以て國典を犯すと爲し、群起して之を死に置かんとす、去れば五百人會も、亦た四百九十九人の一致を以て、彈擊死に問はんとす、此日の大問題とは、之を謂ふなり、瑣氏は獨り其罪に非らざるを信じ、身は大理石の盤るか如く、最も冷やかに之を排して聽かず、熱憤雨下、瑣氏は益々冷やかに之を排すあり、曰く、余は正しきに従はざるを得すと、嗚呼吾れ春行秋令の語

を聽く久し、瑣氏の如きは則ち眞に秋行秋令する者。

國分青崖賛曰。

厨無一菜。盤無一鱗。兒泣妻愠。晏然接人。去情排慾。始見天真。非道之窮。此家之貧。

#### 第四回

○デルファイ塔の神示 ○問答

瑣氏の至清至淨は、其の至奇至癖に發し、瑣氏の至高至大は、萬慾を排して成る、平生の素養ひ來て此の如きのみ、所謂る水立ち山飛ふ壯觀を演せしには非ず、而して神は今まデルファイの託宣に憑りて、瑣氏を人間の第一壇に上らしめんとするぞ、畏こし、是より先き、瑣氏の一友はデルファイ塔に詣りて神意を乞ふ、神意は恍として咫尺に下れり、曰く、萬民の賢は、爾か瑣克拉的なり、行

け。と、此の突如たる神託には、其人も一驚せり、一驚して之を瑣氏に告げしあり、瑣氏も亦た自ら驚けり、吁。噓。神。萬。民。の。賢。我。は。則。ち。瑣。克。拉。的。な。る。か。や。

瑣氏は毫髪神意を疑はず、復た其友を信せざるに非ず、而も己れ則ち未た之を信する能はざるなり、之を信する能はざるは、以て神意を解明するに由し無ければなり、蓋し瑣氏の萬人の賢たるに負かざる所以の者は、亦た只た殆ど其の之を信せざる所以の中に横はるのみ、而して瑣氏

殊に未た之を悟る能はざるなり、斯くて瑣氏は幾日踟躕の中、頻りに其思を悩ませしに、終に一の決心は來れり、曰く、余れ萬人に接して一々談を試みなば、神意は之を證するに難からんと、而して彼は直に此の決心を實行せんとす、彼は門を出てり。

門を出て、瑣氏の足は、先づ何れにか向ひしを、當時雅典の人、萬口一辭、最も賢なりと稱する某の門を叩きける、而して瑣氏豫め意ふ、若し某にして果して余よりも賢ありせば、余は直にデル

ファイ塔に馳せ、神に事問はん、神よ、爾は余を萬人の賢なりと告げ給ふと雖も、猶ほ余に勝るの賢者あるは如何にやと、其時神は復た明かに余の惑を釋き給ふなる可しと、瑣氏は斯く思ひ斯く領きて、偕てこそ某と談を開きぬ、談は今ま闌なり、無數の問答は丁丁として反響す、山高く月小に、石出て水落つ、水颯然として豎たを、石鏘爾とて鳴る、己にて瑣氏は之を悟り得たり、某の賢の如きは、只た世人の眸子に映するに好し、殊に自家の眸子に映し得て、最も妙なることを、因

て瑣氏は斷案を下せり、某に謂て曰く、汝は自ら賢なりと思ふのみ、眞に賢なるに非すと、出て、歸途に上る、途上自ら判す、余は一事確に彼に勝る、夫れ彼と余と共に是れ未だ天地善惡の眞在を知らざるは、相ひ同し、只た彼は既に之を知るか、如くに想ひ、余は正しく未だ知らずと想ふ、是れ余か一事彼に勝る所なりと。

其の時に當て、瑣氏の意や、苟も世に賢なりと呼はるゝ者は、盡く歴問して之と談話を試み、以て神意を昭判せんとするに在り、是に於てか、復た



出て、政治家の門を叩けり、丁丁の問答、暫らくは梁塵を動かすと雖も、殆ど前者と同一の結果を得て去る、更に詩人の門は開かれたり、瑣氏豫め詩人の深く己れに勝る者あらんことを信ぜ、何となれば詩は瑣氏の能くせざる所あり、此日瑣氏は、彼れ詩人か最も得意とする一篇の詩を携へ來り、専ら之に就て論問せんとするなり、瑣氏は須臾にして驚けり、彼は殆ど頑石の如く、無数の發問は之に轉下せと雖も、憂然の音をだに爲さず、蓋し彼は詩を作る、絶へて詩を作る所以

の者を解せざるあり、己にして瑣氏の足跡は、終に閭巷の工人に及へり、之と談するに至ては、固より瑣氏の未だ嘗て聞知せざる事多く、其の工人として瑣氏に勝るものあるは、疑なし、然れども瑣氏は其の己れに勝るものあるを認むると共に、彼にも亦た他の政治家詩人輩と殆ど同一の大過失あるを見たり、其は何そや、曰く、彼等は只た一事の衆に秀出する者あるか、爲めに萬事亦た衆に秀出するありとの謬想を有すること、是かり、此の如くにして瑣氏の足跡は遍し、足跡

ひ。盡。く。し。て。古。今。の。平。あ。る。は。何。れ。の。時。を。此。れ。之。  
 を。思。は。す。憫。む。可。き。は。天。下。自。ら。賢。なり。と。す。る。者。  
 盍。ぞ。顧。み。さ。る。涯。り。有。る。の。生。は。六。尺。の。可。蟲。に。托。  
 す。可。蟲。然。か。く。靈。なり。と。は。云。へ。自。ら。賢。なり。と。す。  
 る。は。自。ら。足。れ。り。と。す。る。に。非。す。や。苟。も。自。ら。足。る。  
 亦。た。何。の。暇。あ。り。て。宇。宙。の。雄。大。に。參。じ。日。月。の。高。  
 遠。を。窺。ひ。以。て。人。間。最。善。の。眞。在。を。極。む。る。に。足。ら。  
 ん。や。善。ひ。夫。瑣。氏。は。則。ち。親。ら。萬。人。を。點。檢。し。來。て  
 日。く。世。人。皆。を。知。ら。ざ。る。を。識。れ。り。と。思。ふ。余。れ。獨。  
 り。識。ら。さ。る。を。知。ら。ず。と。思。ふ。と。是。れ。瑣。氏。か。纔。に

斯。に。遍。く。し。て。神。意。は。果。し。て。昭。明。せ。り。瑣。氏。乃。ち  
 豁。然。と。し。て。曰。く。余。か。在。り。と。如。く。に。在。れ。や。余。ハ  
 茲。に。在。り。と。  
 吾。れ。是。に。於。て。竊。に。感。あ。り。夫。れ。天。下。自。ら。賢。あ。り。  
 と。す。る。よ。り。愚。あ。る。は。無。く。天。下。自。ら。愚。なり。と。す。  
 る。者。賢。孰。れ。か。之。に。加。へ。ん。や。由。來。天。は。迷。迷。た。り。  
 地。は。密。密。た。り。仰。て。天。闕。を。望。め。や。森。然。た。る。星。斗。  
 宇。宙。の。測。る。可。か。ら。さ。る。眞。に。幾。何。を。俯。じ。て。大。地。  
 を。見。よ。萬。物。の。磅。礪。す。る。者。誰。か。得。て。而。じ。て。之。を。  
 極。め。ん。や。況。ん。や。日。月。の。推。を。へ。か。ら。さ。る。劫。灰。飛。

己れ萬人に勝れりと確信せし一點のみ、而して神の萬民の賢かりと示し給ひし所以の者焉。亦た此の一點に存せざる無きを知らんや。瑣氏の萬人を點檢して、到る處に銳利なる問答を放つや、方には是れ深く世人の仇讎を招きしことを記せずんはあらず、何となれば則ち瑣氏か晩年に及て、其の至高至大を刷騰し、其の至清至淨を洗鍊し、表表たる天半の風色、以て八面玲瓏の神威を大成せし所の一死は、亦た殆ど此の仇讎の逼り出たせしに外ならず、蓋し瑣氏の問答

は、直に空を指す羿弩の如く、必ず天に達せずんは休まず、之に觸るゝ者、假面乍ち破る、其の小丈夫の嫉怨を買ふ、勢ひ免るへからざるなり、左にアリスナパスなる者との問答を録するは、以て當時の一斑を髣髴するを得んか爲めのみと云ふ。

アリスナパスなる者、嘗て瑣氏を啣む、今は自ら奇問を發して、左出右入、必ず之を擒するを期す、率爾として問て曰く、瑣子汝は世に善なる物あるを知れりや、瑣氏曰く、汝か所謂る善とは何を

や、世に熱疾あり、汝か善なる物とは、之に向て覓  
 みる乎、ア曰く否、曰く、然らば世に眼疾あり、之に  
 向て覓みる乎、ア曰く否、然らば飢渴乎、ア又た曰  
 く否、瑣氏謝して曰く、汝復た言ふ莫れ、何爲れそ  
 汝か善の漠然たるや、余れ之を知らず、亦た之を  
 知るを欲せずと、ア默然たり、率爾復た問て曰く、  
 汝美を知れりや、瑣氏曰く、頗る多く之を知れり  
 と、ア悦て曰く、汝多くの美を知る、其物皆を相同  
 しきや否や、瑣氏曰く、其物は各々異なれり、ア急  
 に嘲て曰く、異なる者は相反せざるを得ず、猶ほ

黒と云はゞ此に白と云ひ、大と云はゞ此に小と  
 云ふか如し、汝美を知れりと言ひ、其物異なりと  
 言ふ、故に異なる者は、美醜相反せざるを得ず、豈  
 に皆な之を美と謂ふ乎、瑣氏曰く、汝走る者を見  
 すや、鳳翥する時、何そ美なる、此人角力して蝦蟇  
 せは、醜と謂はさらんや、又た甲鎧を見すや、大漢  
 之を穿ては美なりと曰ふも、矮者之を被らは醜  
 ならさらんや、ア默然たり、已にして曰く、汝の答  
 は皆な要を得すと、蓋し窮して辭を作すのみ、瑣  
 氏乃ち問て曰く、ア子汝か所謂る善と美は相同

しき乎、余れ先つ言はん、善美皆な一なり、故に人の操行を以てして此時美彼處善、是れ眞の操行からト、美かれは則ち善、善なれば則ち美、一丸兩轉して而して必ずや用を爲す者、此れ至れりと爲す、ア曰く、此の如きか、蓄糞の器亦た美なりと謂ふ乎、瑣氏曰く、然り、其器能く蓄糞の用に合ふ、是れ善なり、是れ美なり、何を疑はんや、苟も然らず、驅金鏤玉、以て甲鎧を裝ふ、士穿て戰場に臨む可からすん、用無きなり、用無きの善たるを得ト、亦た美たるを得ト、ア曰く、同じく是れ一物、或

の之を美と云ひ、或の之を非美と云ふを得る乎、瑣氏曰く、膏肉の饑を醫す、故に病を醫すや、薬の病を治す、故に饑を治すや、子去れ、去て而して山何故に高さか、水何故に卑くさかを問ひ來れと、是に於てアリスチパスの辭屈し、悄然として去る。

國分青崖賛曰。

我果賢乎。天理多疑。果不肖乎。神言是私。飾博粧智。舉世自欺。人不知知。我知不知。

第五回

○萬民の師○感化

余は教育上の産婆ありとは、貧しき彫刻師を父  
 とし、て憐れある産婆の胎内に宿り來りし所の  
 彼れ、瑣克拉的が、今そ神の命を畏しこみて、萬民  
 指導の途に上らんとする第一宣言なり、嗚乎、奧  
 い哉、言や、思へは彼の母の産婆とは何の業ぞ、豈  
 に人に代て自ら兒子を造り得へきならんや、亦  
 た只た能く幫助の勞を盡くすと云ふのみ、然れ  
 とも、是れ確よ涙の事業なり、其の慈顔悲手、春の

繚繞するか如く、一たび産婦の緩急に接しては、  
 世に有り難き化育の救主たらずんはあらざる  
 なり、然れば則ち寧ろ此母にむて而して此兒あ  
 るか、母は身肉の産婆と爲り、兒は心靈の産婆と  
 爲る、涙の事業、孰れか之に加へんや、懷殺す、余は  
 教育上の産婆なりとは、豈に君子人を恍惚たら  
 しむる至音ならずや。

基督の經を説くや、直に神の子と謂ふて自ら疑  
 はす、復た人類を以て之に居らざるなり、是れ衆  
 愚を欺く可し、未だ以て識者を首肯せしむるに

足らず、願ふに世の草昧に屬するや、以て欺き易  
 し、以て悟とし難し、英雄時を詳にして薬を下す  
 とすれば、基督も亦た未だ免れざるなり、是れ文  
 明を以て誇る彼土に在ては、猶ほ積習に乗じて  
 纔に其の信仰を繋ぐに足ると云ふと雖も、彼等  
 の所謂る東洋未開國に向て、其教を致すに及て  
 は、獨り有力なる識者の心服を博するに足らさ  
 るのみならず、少しく智力の卓立したる者に遭  
 へば、頗る其の淺薄を掩ひ難きにあらずや、而し  
 て是も亦た眞に然らざるを得ざるものあるな

り、何とあれば則ち此の一點に於ては古來釋迦  
 の如き、孔丘の如き、其の眞如を示し、天人を説く、  
 最も高遠精微を極むる者あればなり、蓋し基督  
 の如きは、情に訴ふるを知るのみ、故に自ら人以  
 上に立たさるへからず、釋迦孔丘の如きは、識よ  
 り、情に入らる、故に理先づ精ならざるへから  
 す、而して今ま瑣氏の如きは、専ら識を啓かんと  
 するに在るなり、然りと雖も、大雄氏四萬八千經、  
 彼徒か小乗と稱する一半は、猶ほ英雄欺人の語  
 たるを免れず、而して仲尼も亦た民は由らむ

可<sup>い</sup>、知<sup>ら</sup>、い<sup>む</sup>可<sup>か</sup>ら<sup>ず</sup>と<sup>い</sup>ふ、民<sup>知</sup>ら<sup>い</sup>む<sup>可</sup>か  
 ら<sup>ず</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>者</sup>は、安<sup>そ</sup>其<sup>の</sup>悟<sup>と</sup>い<sup>難</sup>きを<sup>以</sup>て<sup>に</sup>  
 非<sup>ら</sup>、さ<sup>る</sup>無<sup>か</sup>ら<sup>ん</sup>や、夫<sup>の</sup>瑣<sup>氏</sup>の<sup>如</sup>きは<sup>則</sup>ち<sup>必</sup>  
 す<sup>や</sup>盡<sup>く</sup>之<sup>を</sup>悟<sup>と</sup>い<sup>得</sup>て、而<sup>し</sup>て<sup>後</sup>に<sup>已</sup>ま<sup>ん</sup>と<sup>す</sup>  
 する<sup>なり</sup>、故<sup>に</sup>余<sup>は</sup>教<sup>育</sup>上<sup>の</sup>産<sup>婆</sup>なり<sup>と</sup>言<sup>ふ</sup>者  
 は、瑣<sup>氏</sup>固<sup>に</sup>始<sup>より</sup>人<sup>類</sup>の<sup>皆</sup>な<sup>之</sup>を<sup>悟</sup>と<sup>り</sup>得<sup>る</sup>  
 の<sup>靈</sup>能<sup>あ</sup>る<sup>を</sup>疑<sup>は</sup>さ<sup>る</sup>なり。  
 瑣<sup>氏</sup>既<sup>に</sup>人<sup>類</sup>を<sup>以</sup>て<sup>居</sup>り、而<sup>し</sup>て<sup>人</sup>類<sup>の</sup>能<sup>く</sup>萬  
 慾<sup>を</sup>排<sup>し</sup>去<sup>て</sup>、直<sup>に</sup>天<sup>地</sup>の<sup>最</sup>善<sup>を</sup>呼<sup>吸</sup>する<sup>に</sup>至  
 ら<sup>は</sup>、則<sup>ち</sup>皆<sup>な</sup>其<sup>の</sup>天<sup>地</sup>と<sup>共</sup>に<sup>茲</sup>に<sup>無</sup>窮<sup>なる</sup>を

信<sup>す</sup>、而<sup>し</sup>て<sup>一</sup>切<sup>の</sup>人<sup>類</sup>は、皆<sup>な</sup>齊<sup>しく</sup>此<sup>境</sup>に<sup>達</sup>  
 し<sup>得</sup>る<sup>の</sup>靈<sup>能</sup>を<sup>有</sup>する<sup>を</sup>疑<sup>は</sup>す、故<sup>に</sup>瑣<sup>氏</sup>の<sup>人</sup>  
 を<sup>導</sup>く<sup>や</sup>、天<sup>を</sup>禱<sup>る</sup>に<sup>非</sup>ず、地<sup>を</sup>祭<sup>る</sup>に<sup>非</sup>ず、爨<sup>舎</sup>  
 を<sup>築</sup>て<sup>門</sup>戸<sup>を</sup>張<sup>る</sup>に<sup>非</sup>ず、到<sup>る</sup>處<sup>の</sup>閭<sup>巷</sup>皆<sup>を</sup>爨<sup>舎</sup>  
 舎<sup>なり</sup>、壇<sup>に</sup>上<sup>て</sup>書<sup>を</sup>講<sup>する</sup>に<sup>非</sup>ず、眼<sup>に</sup>觸<sup>る</sup>、  
 處<sup>の</sup>萬<sup>物</sup>皆<sup>を</sup>書<sup>なり</sup>、而<sup>し</sup>て<sup>苟</sup>も<sup>相</sup>逢<sup>は</sup>ゞ、則<sup>ち</sup>  
 老<sup>を</sup>問<sup>は</sup>す、少<sup>を</sup>言<sup>は</sup>す、男<sup>た</sup>ると<sup>女</sup>た<sup>ると</sup>を<sup>論</sup>  
 せず、富<sup>貴</sup>貧<sup>賤</sup>、軍<sup>陣</sup>の<sup>人</sup>、行<sup>路</sup>の<sup>人</sup>、鰥<sup>寡</sup>孤<sup>獨</sup>、蹙<sup>の</sup>  
 人<sup>、盲</sup>の<sup>人</sup>、七<sup>兵</sup>衛<sup>も</sup>來<sup>い</sup>、太<sup>郎</sup>作<sup>も</sup>來<sup>い</sup>、ザ<sup>ヨ</sup>ン<sup>も</sup>  
 可<sup>なり</sup>、ヂ<sup>ャ</sup>ツ<sup>ク</sup>も<sup>可</sup>あり、共<sup>に</sup>話<sup>し</sup>せ<sup>ん</sup>の<sup>み</sup>、前



を行く牛の吼へづら珍らしと思は、牛に就て  
 話しせんのみ、後へに嘶く馬の横足短しと思は  
 せ、馬に就て話しせんのみ、此の如くにしてデヨ  
 ンや、太郎作は、是の爺いやに話か旨い奴だな、ソ  
 レ牛の角の話だ、今度は馬の尻尾の話だ、面白い  
 を面黒いそと、覺へず知らず騒ぎ居る中、何時の  
 間にやら、彼れデヨンや、彼れ太郎作の心の帯は、  
 次第に産氣づきて、終には玉の如き眞靈を孕み  
 出たすとあり、瑣氏曰く、艸木は返辭無ければ之  
 と話しせんやうも無し、余は只た廣く人と話し

するを要すと、斯くて何れにても市人の群を作  
 す處は、少しも頓着無く、我よりつかく推し掛  
 け行きて、話を持ち出すあり、而して一度二度と  
 自然其話に親熟し來る者は、孰れとして心の産  
 氣を催さざる無しと云ふ、教育上の大産婆其の  
 功德も亦た大なる哉。  
 或は疑はん、瑣氏か愚夫愚婦に接して其の牛馬  
 自在の談話を恣にするは、亦た大雄氏の方便に  
 類するあらんかと、是れ然らす、瑣氏は欺かす、是  
 を以て方便なり、故に牛を問ふて馬を買ふ者は、

方便あり、牛を問ふて牛を答へ、馬を問ふて馬を答ふる者、此れ豈に方便あらんや、之を舟楫彼岸に濟するに譬ふ、舟中の客をして白布眼を縛して、而して之を彼岸に送る、是れ方便あり、眼邊の白布を徹して、飽くまで萬慾の狂瀾を目送して、而して後彼岸よ上らしむ、是れ方便あらんや、故に瑣氏の説に曰く、悪行は乃ち無識より來ると、由來方便も亦た無識の内に寓す、而して瑣氏の如きは則ち直に有識を以て、悪行を排せしめんとするに在るなり、此れ豈に方便の能くする所

ならんや、故に瑣氏の言に曰く、余は只た人の心を明にして、其過を去らしめんと欲するのみと、夫れ無識は則ち夢幻に迷ひ、有識は則ち覺醒に遊ぶ、而も能く覺醒に遊ぶ者、幾何そ、故に瑣氏曰く、世人皆な眠る、余れ起て之を覺まさざる可からすと、眠れる者は憐む可し、彼等の夢に上る春の榮華は、夕の露と消へ、身に餘る富貴の光も、野末に咲ける百合の花には、孰れ優り劣りぞ、斯くては、嘻れしぞと思ふ名譽の響も、曉の鐘をだに待たト、紅顔は秋と枯れ、白髪は霜と冷し、之を思

へ。は。何。そ。起。た。さ。る。起。て。無。窮。の。物。を。求。め。さ。る。や。  
 傷。ま。し。い。哉。眠。れ。る。者。は。之。を。知。ら。さ。る。な。り。故。に  
 瑣。氏。は。嘆。息。し。て。曰。く。富。と。云。ひ。貴。と。云。ひ。權。と。云。  
 ひ。美。と。譽。と。云。ふ。皆。か。一。時。の。物。の。み。最。善。は。天。地。  
 の。無。窮。な。る。者。を。と。夫。れ。眠。れ。る。者。は。終。に。之。を。知。  
 る。の。道。無。き。乎。那。そ。然。ら。ん。起。て。は。則。ち。眼。前。に。來。  
 る。か。り。故。に。瑣。氏。常。に。曰。く。善。く。汝。自。身。を。識。れ。  
 瑣。氏。の。當。世。に。及。ほ。せ。し。感。化。は。一。例。翔。天。の。出。日。  
 乎。照。ら。さ。さ。る。所。無。き。な。り。王。者。あ。り。之。を。照。す。乞。  
 兒。あ。り。亦。た。之。を。照。す。嘗。て。忌。む。所。あ。ら。ん。や。然。れ

と。も。王。者。長。殿。を。張。て。空。を。斷。た。は。大。日。も。其。光。を。  
 之。に。及。ほ。し。難。し。乞。兒。中。野。に。立。て。は。大。光。婆。娑。と。  
 し。て。來。り。滿。つ。遮。る。無。け。れ。は。な。り。故。に。意。無。ふ。し。  
 て。隱。る。者。は。仍。は。意。無。ふ。し。て。顯。は。る。を。待。つ。  
 可。し。意。有。て。而。し。て。隱。る。者。は。天。日。と。雖。も。之。を。  
 強。ゆ。可。か。ら。ず。何。そ。瑣。氏。の。此。輩。を。強。ゆる。能。は。す。  
 し。て。還。て。之。か。爲。め。身。を。以。て。其。の。道。に。殉。す。る。ま。  
 至。り。し。を。怪。し。ま。ん。や。ラ。イ。シ。ス。あ。る。者。あ。り。放。邪。  
 甚。し。瑣。氏。慙。懃。之。と。相。ひ。話。し。て。終。に。最。善。の。人。と。  
 は。爲。し。ぬ。エ。ン。シ。フ。ロ。ム。な。る。者。あ。り。瑣。氏。之。と。途

に會す、瑣氏其の何れに行くやを問へは、法廷に  
往て事を訴へんとするを答ふ、瑣氏靜に事の故  
を聞きて、終には之を思ひ止まらめぬ、シヤ  
ニダスは達徳の人なり、只た性極めて謙讓にし  
て、固く衆望を辭して政務に參るを肯んせず、瑣  
氏乃ち之を説て終に衆望に従はむ、更し著名  
ある話柄として傳へらるゝは、グローコンなる  
者あり、彼れ漫に政治家たらんと揚言す、適く瑣  
氏と連問連屈、終に退て先づ各般の智識を討究  
することゝはなれり、諸く此の如きの類は、固よ

り得て數へ盡くす可くもあらざるべしと雖も、  
皆な是れ意有て而して隠れ去らんとするもの  
よあらず、光明の齊しく之に及ぶ所以あり、況ん  
や瑣氏門下の英、或はプレトリーの如き、或はゼノ  
フホンの如き、或はユークリッヅの如き、或はクリー  
トリーの如き、日月周旋し、斗拱星擁して、以て一世  
の經緯す、其の感化の大、其の勢力の偉、洵に一時  
雅典を震盪せしや、疑無し、是よ於て乎、忌者妬者  
讒者佞者四出して争ひ尤む、此れ先聖の往々一  
轍に歸して如何ともすへからざる所なり。

國分青崖賛曰。  
 貧富無別。貴賤無差。一切誘導。只道是期。  
 玄妙其理。深切其辭。萬民之母。百世之師。

第六回

○罪案 ○辨護 ○審判

彼、か、七、十、年、の、經、營、は、惟、た、吾、徒、の、眠、れ、る、を、起、た、  
 り、惟、た、吾、徒、の、迷、へ、る、を、覺、と、り、吾、徒、を、教、へ、吾、徒、  
 を、導、か、ん、と、す、る、世、に、尊、ぶ、と、く、も、父、と、仰、き、師、と、  
 事、へ、ん、人、な、ら、ず、や、時、に、何、物、を、之、を、囚、へ、之、は、罪、  
 案、を、誣、ひ、之、は、辨、護、を、強、ひ、之、は、審、判、を、擬、す、其、の、  
 業、の、如、何、は、か、り、淺、間、と、き、仇、讎、な、れ、や、吁、人、類、も、  
 此、に、到、て、は、豺、狼、だ、し、食、は、さ、る、可、し、然、り、と、雖、も、  
 千、百、年、の、後、舉、て、光、あ、る、悔、悟、の、燈、を、翻、へ、し、以、て、

萬世の師と奉らんとするを見れば、其の心の又、如何はかり頼母いさき朋友かれや、蓋し人類も此に非ずんは、彼れ亦た初より斯く導かんとはせど。

今や瑣氏は、ミレタスなる者の訴よ由り、奇怪なる三箇條の罪案を帯ひて、雅典の法廷へと引き出たされんとはするなり、三箇條の罪案とは、何をか示す、曰く、瑣クラ的は國教を信せず、曰く、瑣クラ的は異教を唱ふ、曰く、瑣クラ的は少年の教育を汚すと、此れ實に七十の老翁か永訣の罪案

なり、當時雅典の法廷は、其制頗る近世に異り、事を判する法官の數も、少きは數十人より、多きは則ち數百人の上に出て、傍聽の衆、千百群を爲し、時に呼譟の狀、大野風の來往するか如しと云ふ、瑣氏は出てり、爰に親ら辨護の勞を執らんとするなり、是より先き、ライシスなる法律家あり、瑣氏の朋なり、頻りに心血を費して、瑣氏の爲めに精博なる辨護を綴り、之を瑣氏に送る、瑣氏一讀下、笑て曰く、是れ法律家の辨護のみと、而して瑣氏殊に未だ嘗て毫髮辨護の念あらず、傍人に謂

て曰く、斯る法廷に立て一言の辨護を試む、余れ  
 兒戲に堪へずと、然れとも雅典の法律は之を許  
 さす、必ず先づ辨護の經過を了らむ、瑣氏の之  
 は従ふ、其の志は非らざるなり、而して此の辨  
 護の始終は、實に瑣門群英の魁たるプレト―其  
 人の大手腕に憑りて直筆せらるゝ者、何そ其の  
 精神風貌の、今に至るまで颯颯として紙上は震  
 動するものあるを怪まんや。  
 瑣氏は起てり、起て三個條の罪案は、由來皆な小  
 人の纒誣なるを明にし、聲は次第に冷すしくあ

りぬ、曰く、若し人あり、汝か罪は許し呉れん、能く  
 汝か教を思ひ止まんや、否やと問ふ者あらんか、  
 余は斯く答ふ可し、將の命を受けて戦陣に在る  
 や、死生は與らんと、余はデルフアイの神命を受く  
 る者なり、死生豈に余に與らんや、余に一日の呼  
 吸あらは、一日汝等か眠を覺まさむる可からず  
 と、是に於て、法官は結審を命じ、決を採るに及て、  
 先づ有罪を宣す、ミレタスなる訴人は、彼に死を  
 加へよと叫べり、法官は仍ほ瑣氏の意見を問ふ、  
 瑣氏は曰く、余れを生涯學院に保育せよと、最後

の投票は、盡く悪魔よ由て擲たれたり、肝嗟是れ  
 底事そ、人間の死刑なる者、今ま若人の頭上よは  
 墜ちんとするなり、是れ何の罰是れ何の罪なる  
 そ。  
 斯くて瑣氏は悠然として將に獄に赴かんとす、  
 顧みて謂て曰く、汝等早やまれり、余老ゆ、今ま暫  
 らく待ちならん、は、余は自ら汝等か指す處  
 に向ひならんものを、惜ひ夫、余は法律に服従  
 せざる可からず、而て汝等獨り罪無とせん  
 や、抑も余の之を招きか、將た汝等の之を致す

よ由るか、亦た皆か、天の約束ならんのみ、思へは  
 死何物そ、死夫れ無乎、夫れ夢か、き眠の如き乎、夫  
 れ或は天の樂土に嚮はん、化境なる乎、死無なり  
 ど、すも善い、夢なき眠ならんも、又た悪い、から  
 ト、但た天の樂土に嚮ふを得んに、は、一事殊に善  
 い、何となれは、余は其時こそ、眞の法官の裁斷を  
 仰く可きなり、而て後余は床か、いと懐ひ、ホ  
 !、マ、や、ツ、ロ、イ、の、英、雄、よ、邂逅、て、一、場、の、物、語  
 あらん、死果、こ、て、此、の、如、き、か、余、は、即、ち、千、百、の、死、を  
 を願ふなり、今は只た明かに之を知る、生と死を



そ。涙。姦。よ。夫。非。孰。等。せ。汝。  
 磊。四。を。來。れ。す。れ。猶。よ。等。  
 磊。垂。以。て。死。ん。か。ほ。余。正。  
 た。頻。て。其。は。は。好。生。は。義。  
 る。り。す。の。人。復。運。け。今。の。手。  
 而。に。と。平。生。の。之。を。り。時。別。に。  
 も。兒。雖。も。を。一。大。知。と。謂。ひ。告。就。  
 時。女。の。此。欺。斷。ら。謂。ふ。て。ん。か。さ。  
 至。の。憐。に。き。了。案。ト。か。し。得。べ。き。歟。寔。に。神。よ。  
 て。乾。を。來。て。へ。ん。や。而。と。死。汝。の。生。果。し。て。  
 坤。叙。す。は。自。ら。屍。を。疑。ひ。暗。老。此。  
 を。赤。豐。太。閻。の。雄。略。何。

に。汝。め。益。の。に。を。の。は。論。  
 は。等。し。無。三。憑。勵。日。之。せ。  
 余。若。如。く。兒。を。苦。能。か。疑。す。  
 は。し。く。飽。て。苦。る。は。平。は。曾。  
 則。余。に。く。益。る。し。と。り。汝。や。人。  
 ち。對。ま。有。し。め。思。ひ。は。噫。戒。三。禍。  
 余。の。し。て。余。が。街。は。無。程。に。飽。人。言。の。小。兒。あ。り。若。し。生。長。  
 三。兒。と。よ。死。後。の。三。兒。を。責。め。よ。や。  
 共。に。之。を。爲。す。こ。と。を。得。ん。  
 何。の。時。か。甘。し。て。

生。講。純。至。吾。す。に。こ。知。動。  
 の。す。正。粹。れ。只。懸。て。る。揺。  
 破。と。な。な。是。た。る。而。死。す。  
 的。云。る。る。を。明。あ。こ。夫。る。  
 な。ふ。死。者。以。明。り。て。れ。よ。  
 ら。者。の。乎。故。知。る。白。雖。徹。非。  
 す。彼。學。に。る。光。も。徹。底。者。さ。  
 や。何。問。瑣。氏。の。四。此。所。待。無。  
 而。を。笑。氏。常。表。に。無。た。ん。か。  
 死。か。ふ。可。謂。は。夫。を。拂。ふ。を。吾。  
 一。死。は。世。の。哲。學。と。は。の。  
 九。死。は。則。ち。彼。徒。畢。を。は。  
 前。に。來。ら。は。恰。

す。反。せ。た。る。可。古。彼。笑。知。  
 由。照。さ。ひ。あ。き。來。は。底。ら。  
 來。を。る。此。り。者。馬。實。事。す。  
 馬。示。可。に。吾。上。に。ぞ。猶。  
 上。の。悔。は。れ。の。の。凄。拿。ほ。  
 の。英。悟。者。是。一。英。絶。破。町。  
 雄。者。悔。者。を。死。雄。慘。翁。寧。  
 惡。悔。者。小。は。以。恃。所。絶。に。寡。  
 ぞ。其。小。者。は。之。に。む。謂。の。至。孤。  
 其。映。小。對。知。足。血。を。は。囑。  
 の。壓。反。こ。死。ら。を。極。吾。こ。  
 壓。壓。を。必。夫。さ。數。と。言。休。  
 虐。者。示。と。鏡。の。往。々。壯。可。忍。平。  
 反。照。を。望。映。大。發。一。然。

も備無くして驟に襲はるゝ者の如く、驚て狼狽を爲す、此れ何をか爲すと、然れとも司馬子長云へるあり、死或は泰山より重く、或は鴻毛より輕く、是の如きか、死の必ず亦た其所を得んあり、牖下狼狽、彼れ固と言ふに足らず、乃ち徹底の大人と雖も、泰山一死、大に其所を得と者、有死以來、凡そ幾人を、吾れ是を以て瑣氏の死を觀んこととを欲するなり。

越て一日、是れ瑣氏か死に赴く可きの日なりとも、遇々希臘の國祭は、此日に始まり、以て三十日

間の久しきに涉らんとせり、而して國の習例は、此間刑獄を行ふを許さず、是より於て、瑣氏も亦た幽囚三旬、僅に一重の園土を隔て、は、都人歡呼の聲、日々地を動かすを聞く、世より心無き有様なり、瑣氏は乃ち獄を匝りて慕ひ來る子弟を制し、溫平たる其容常に勝り、或は慰め、或は勵まし、許多の談話を催して之に聞かためぬ、ゼノフォン泣て曰く、何そ其の從容とて、快きや、眞に吾徒を以て一辭を敷く能はさらむと、天も之を聽さなは、濕はさるを得さる可し。

國分青崖賛曰。

紊亂國教。蠱惑人子。奇獄繫賢。誣言構罪。  
平生之學。只講一死。鼎鑊刀鋸。於我何在。

第七回

○死

生知る有りとなす乎、死知る無しとなす乎、生知る有りとなせば、死も亦た知る無しとなせんや、死知る無しとなせば、生も亦た知る有りとなせんや、孔丘之を言ふ、未だ生を知らず、安そ死を知らんやと、是れ死生の抑も二途ならざるを謂ふなり、此に生を知る、即ち死を知るなり、此に死を知る、即ち生を知るなり、何そ疑はんや、故に世に荒唐を拾ふ羅長源の路史の如きは、此れ所云る庸俗の地

獄極樂説あり、而して有虞氏の治亂を叩きし門  
 無鬼の一問、正に纔に死生不二の致に庶幾しと  
 爲す、然りと雖も、死生は由來天地の悟境に屬す、  
 人類の之に參透する、惟た直覺の一路あるのみ、  
 豈に舌之を暢へ筆之を傳ふへき者ならんや、此  
 點に於て釋迦は脱落を極むと謂ふ可し、基督は  
 荒唐を極むと謂ふ可し、孔丘は謹嚴を極むと謂  
 ふ可し、而して夫の瑣克拉的は則ち何如を嗚呼  
 彼は今ま親しく一死を以て、其の八面玲瓏の止  
 觀を示さんとはするなり。

三十日の日子は、已に其の二十八日を昨日の夢  
 とは爲しぬ、是よりして兩日を経なは、希臘の國  
 祭は終を告ぐるの時にして、國祭終を告げなは、  
 即ち瑣氏か死に赴くの時なる可し、去れは瑣氏  
 の生も、今は只た兩日を限らる、此夕クリート  
 は來れり、來て瑣氏に獄を脱せんことを勸むな  
 り、因て説て曰く、足下に朋友あり、盍ぞ少しく朋  
 友の心を察せさる、足下に妻兒あり、願はくは妻  
 兒の情を憐めや、況んや足下にして顧みずは、余  
 は竊に足下か三兒の教育を悲しむなり、余に若

千の旅資あり、外國人某亦た足下の爲めに其の貨財を擲たんことを樂めり、足下何ぞ一たひ獄を脱して境を出て、徐ろに後圖を爲さざるやと、瑣氏應て曰く、故人の情は嘉す可し、但た其の情の向ふ所は、余の最も屑しとせざる所なり、公等獨り思はずや、余は再思して罪に服せり、今よして之を逃れんとす、知らず、公等能く之を奪ふの解説ありやと、兩者の應答は、此に端を發し、或は泣き、或は訴へ、或は諭し、或は斥く、世よも頼母しき高義なる哉、瑣氏乃ち謝して曰く、公等復た言

ふを休めよ、余は國民の一人として、法律に服従せざる可からず、一たひ法律を破る、國の大綱は紊れんなり、余にいて自ら之を爲す、是れ余は國に負くなり、公等余を強いて之を爲す、是れ公等も亦た共に國に負くなり、吁、此れ俱に忍ふ可けんや、余に神籟ありて常に身邊に伴ふ、今や寂然來らず、是れ明かに天心の與みせざるなりと、遂に聽かす。

國祭は終を告げけり、瑣氏の死は今を逼れり、此日何日ぞ、瑣氏は未明より獄を繞りて集い來た

る子弟を近づけ、粗ほ之に靈魂不滅の談を試み、心竊に永訣の辭とは爲さんとするなるべし、己まして瑣氏は起てり、起て別室に入り、沐浴を取らんとす、クリートー亦た後を逐ふて起つ、瑣氏之を容れず、獨り自ら去る、クリートー等相顧みるのみ、凄然として言無きや久し、稍く少焉らくして、嘆息は個々に傳はり、涙も時に聲を洩らしぬ、去りとは道を講じ義を勵み、志を金石に比へし、雅典の丈夫兒も、流石に淺からざりき師弟の契りには禁へ得ざりけん、一齊に瑣氏の死を傷

みて止まず、思へは今ま靈魂不滅の事をだに聽きつるが、兎やあらん、角やあらん、相別れし後は、吾徒も孤兒の恃み無し、抑も何とせんと、此時眞に涙あり、涙は千年朽ちさる可し、恰も瑣氏の妻見ゆ、頑是無き三人の小兒は、前に走り、二三の家僕後に従ひ、俱に盡きせぬ名残を惜まんとなり、彼等は趨て浴室に向へり、瑣氏は之を内に延き、靜に後事を示して、直ま之を去らしむ、斯くて瑣氏は沐浴全く畢り、再びクリートー等の室に返る、復た一語を發せざるあり、天は暮る、獄吏は來

果然獄吏も木石ならず、否か木石も焉そ動かさ  
らんや、彼は實に瑣氏を見て先つ泣けり、曰く、奴  
輩幾多の大囚に接す、其人怒らされは必ず懼る、  
懼れされは必ず罵る、君人怒らす、懼れす、又た罵  
らす、奴輩をして情を爲し難からしむるありと、  
面を掩ふて去る、已まして藥を盛りて再ひ來り、  
戰焉として之を撃ぐ、瑣氏問て曰く、汝先づ余に  
教へよ、余何如して之を收めんや、獄吏曰く、君人  
只た之を服せよ、服し了らは室内を徘徊せよ、下

脚重きを覺ゆる時、横臥せは好しと、盃を瑣氏に  
勸む、瑣氏適然として之を受く、手微顫無し、眼些  
曇無し、之を望めは、平生の溫容一段の春を増し、  
之を窺へは、平生の風骨一層の秋を添ゆ、更に親  
しむ可し、更に近づく可からす、瑣氏は從容且つ  
盃を停め、獄吏を麾て曰く、余れ先つ一滴を神明  
に獻せん、とす、可ならんや、獄吏曰く、纔に君人の  
量に充つるのみ、君人之を察せよと、瑣氏曰く、善  
し、然りと雖も、余れ以て神明を拜せずんは非す  
と、拜し畢て而して一喉之を盡くす、是より先き、



蕭蕭聲を吞て目撃し來りたる子弟等、此時忽ち座を動かし、前後容を放て抱哭す、瑣氏は熟視して曰く、諸賢何をか爲すぞ、曩に妻兒を揮ひ遣りしは、或は此事あるを思へはなり、今は諸賢にて敢て之を爲す乎、余は涙を以て送らるゝを願はず、諸賢何を嘉兆を示して余を送らざるやと、哭聲は寂として罷みぬ、見渡せば、滿座の眼涙、滴るはかりの慙汗とは變はりぬ。

斯くて瑣氏は、獄吏の教に従ひ、少時は室内を徘徊するなり、漸くよして下脚重さを覺へ來る、瑣

氏は乃ち横臥せり、是よ於て、獄吏は瑣氏の下脚を摩挐し、問て曰く、猶ほ痛を感じるや、瑣氏曰く、毫も之を感じずと、因て獄吏は次第に之を摩し、次第に之を上げ、全く下體に遍し、然る時、瑣氏の下體已に感無きなり、蓋し藥力は下よりして上に及ふなる可し、而して此の藥力の心臓に沁沁するの一時、是れ即ち瑣氏が死生の一大關鍵よやあらん、瑣氏は實に此の如く思へり、故に今は一語をクリートよ與へて曰く、クリートよ、爾は余か爲めに一鶏を藥王に奉りて、謝

を致せと、クリートーは直よ之を諾し、猶ほ後事を  
 を得んことを望めり、然れども瑣氏は遂に一言  
 を與へず、静よ身を轉する時、獄吏は白布を取て  
 之を掩ふ、吁、噓寂然。  
 今や瑣氏の一死に向て復た一言を挿むを止め  
 よ、天地大と爲すに足らず、日月明と爲すよ足ら  
 す、八面玲瓏の至境、猶ほ何の言辭か有る、故に吾  
 れ之を言はず、言はさるよ非ず、言ふ能はさるな  
 り、吾は但た其の言ふことを能くする者のみを  
 言ふて、之を已まん、ゼノフォン曰く、彼の用意の精

洞純明なる、嘗て善惡の判別を錯らざるのみな  
 らず、一見人の機微を察し、忽よして其惡を斥け、  
 忽よして其善を導くこと、掌を指すか如しと、此  
 の如きか、吾れの所謂る眼明かなるの眞英雄か  
 らすや、近くはルイス曰く、彼は最も摯實愛憐の  
 人なりと、此の如きか、吾れの所謂る情摯あるの  
 眞英雄か、らすや、ゼノフォン又た曰く、彼は絶大を  
 る信仰を有し、常に神籟ありて來往すと、是も亦  
 た吾れが所謂る古今を貫く直覺力なり、近くは  
 ルイス又た曰く、彼は徹底の識感を有すと、是も

亦た吾れか所謂る死生を破る赤心あり、夫れ吾れ首に英雄崇拜を論じて、品題の四要を列し、而して獨り此の瑣克拉的氏を語り來りし者、那そ偶然あらんや、世に人類の優劣を認めずと曰はゞ、則ち已む、苟も然らすんは、大丈夫皆な宜しく一篇の英雄崇拜論を袖よすへきなり。

國分青崖賛曰。

已知有生。豈疑有死。從容就刑。其色如喜。

德塞六合。名耀青史。茫茫萬古。一人而已。

## 第八回

○餘言 ○輿論 ○學者

陳齊の野に彷徨して、覺へず、吾道非輿の嘆聲を洩らせし東土の孔丘と、殆ど其時を同じくせる彼れ瑣克拉的か、更に甚しき丕運に遭逢して、遂に刑獄の死に就くに至りしは、豈に大人の世に容れられざる、東西其規を一にすと謂ふ可きか、何そ其れ瑣氏の此極に抵るや、孔丘は吾れ言はす、瑣氏よ至ては、吾れ之を言はざるを得ず、何となれば則ち其の三個の罪案の如き、固より小人

一時の假構たるに過ぎすと雖も、而も此の假構の偶然にも直に死を値ひするに及ひしを見れば、是れ必ず別に深因あらんなり。抑も今よりして吾人惱裏に存在する瑣克拉的其人を取りて、之を當時雅典人の眼中に來往せし瑣克拉的に視は、少くとも表背の差は免れざる可し、然かく差異は免れざる可しといひ雖も、苟も瑣氏を目して、眞に異教者なり、國教を信せざる者なり、少年の教育を汚す者なりとは、よも當時の雅典人も、之を信然せしに非らざりしな

らん、而も忽ち之を死に置いて悔るざる者は、是れ吾の必ず別に深因あらんを疑ふ所以なり、蓋し瑣氏の口を開くや、劈頭喝下、他の富貴榮華、權力勢譽等、凡そ世人か日夜にして之に優る者無しと競ひ誇る、俗界一切の假裝物を痛排して、毫髪容れず、此れ誠に吾人の父祖すら降伏せし花田の妖蛇に抗行するに異らす、今則ち千百群を作して前に蟠る、其の嫉狠の逆鱗に觸れざる者、幾何ぞ、況んや瑣氏デルファイの神示を被りし後は、何人を問はず、生熟を擇はず、相逢への必ず徳

行の重す行きを説き、之か爲めに人の集會を  
 碍け、人の職業を妨げて顧みず、是れ瑣氏の信す  
 る所、初より人類の急務として之に過ぐるもの  
 無ければなり、而も其の當世知名の士を叩きて  
 論問するや、連辨連究、假面者は忽ち其の假面を  
 剥き、遂に其人をして余は未だ眞に善惡を識ら  
 ざりきと自白するの已むを得ざるに至らしめ  
 て、纔に已む、此等の點に於ては、瑣氏も殆ど癖絶  
 頑絶を極むと謂はんか、去れば當時の雅典人に  
 在ては、寧ろ其煩に堪へずして、却て此の老翁を

厄介視するに至りし者も、自ら多に居りしなら  
 ん、然れども一方より視れば、瑣氏の此を以て當  
 世に有せし勢力は、亦た頗る大なりしこと疑無  
 し、夫のプレトリーの如き、ゼノフホンの如き、クリ  
 トーの如き、一時の賢才、其門に集るに非ずや、而  
 して瑣氏の適々之に因て一身の忌妬を擔ひし  
 者、世態は常に然るなり、殊に雅典人の心の動き  
 易きや、世は方に詭辨の逆流に迷ひ、是非常無く  
 して、泛萍の恃み無きか如し、斯く數へ來らは、孰  
 れか瑣氏か仇ならさらん、吾れ是を以て三箇の

罪案は、一片の假構に過ぎずして、其の深因は此に存するを思はずんは非ず。且つ夫れミレタスの事無かりすと雖も、瑣氏殆ど免れざる者あるなり、吾れ之を言はん、社會は從來血に寛にして、涙に酷なり、故に血の封域に籠りて、優劣を訴ふる者に向てや、社會は意外にも之を寛待すと雖も、苟も涙の明鏡を拭ふて、一世の悔悟を促す者に遭へば、社會は忽ち酷烈の處分を忘れず、是れ孤竹の首陽に餓死し、是れ仲尼の陳齊に跼蹐し、是れ基督の磔死、是れ瑣氏の

毒死、殆ど皆な之か爲めならずんは非ず、西儒嘗て社會に一種先覺を迎ふる峻刑ありと説く、豈に此等を指す乎、蓋し惟ふ、夫の先覺者在り、抑も誰か能く當時に於て、其の果して先覺者たるを鑒識するを得ぞ、故に紙鳶を見よ、地を離れて空に颺る、颺ること愈々高ふして地を離る愈々遠し、離るゝこと愈々遠して眼に入る愈々小あるよし非ずや、今ま先覺者とは、果して其の識靈の遠きに貫くの謂ひならしめば、則ち之を貫くこと愈々遠くして、庸俗の眼に入る愈々微、是も亦た

紙鳶の空に颺るゝ似すや、獨り怪む可きは、社會の待遇あり、血を將て之を洗ひ遣らんとする者に遭へば、路を開て逡巡し、涙を將て之を導き行かんとする者に逢へば、前を塞て疾視す、不幸にして社會の履歴は然るあり、瑣氏の一死、焉を此に胚胎せざるを知らんや。

更に憶ふ、先覺者の一世に率先するに當ては、固ま昨日の社會を一轉過せざるを得ず、是を以て其の説く所、其の行ふ所、多くは一般の思想に迂ひ、自ら從來の嗜好を破壊するの傾向を生ず、是

れ當世に容れられ難き所以か、然れども容れられざるは、毫も先覺たるを累はすに足らざるのみならず、社會は遂に之を容れざるを得ざるに至るを奈何せんや、知る可し、天地の進運は、只た先覺者のみ、豫め善く之を覩て、熟するなり、此に由て之を言へば、夫の輿論ある者、安んか來るや、公議何れより發すや、苟も衆に異なるの所説を爲す者を見て、直ま之を以て輿論ま反し、公議に負くかりと難するあらは、是も亦た未だ公議輿論の何たるを解せざるに坐するのみ、吾れ乃ち此

傳を了へんとするに臨み、竊に當世に憂無き能はざるあり、何そや、輿論公議なる者の、本來其端を一人よ發するは、論なり、而して此の首唱の位置に在る一人は、少くとも當時の識者たらざる可からず、一人之を唱へ、十人之よ和す、和する者は、猶ほ其の所説を審擇するの能力を具ふ可しと雖も、抑も千百人の起て之に應ずる者に至ては、殆ど雷同よ非ずんは、阿附なり、阿附よ非ずんは、比周なり、雷同阿附比周の必すしも可ならざと謂ふよ非ず、何とされは則ち庸愚は之を以て

勢を添ゆるの外、途無きあり、惟た社會の元動點より之を視れば、寧ろ夫の輿論公議の多岐を忌ますして、其の單調を嫌ふなり、異論避説奇議の百出するを患へすして、俗論の一致を恐るゝなり、此の理由よりして西儒は明かに一つの斷言を與へて曰く、人々特存の面目を銷するに至りては、其の社會は末況なりと、退て當世の狀を顧みなは、果して何如と爲す、吾れ竊に怕る、朝野の風潮は、知らず識らす、一種流行の奴僕と爲りて、日々に特存の面目を銷亡するものあるを、今日



西を指さは、舉て西に赴き、明日東を指さは、舉て東に赴く、之が元動點たる者、亦た太た危からずや、仕官中骨人少く、戎衣中義人少く、牙籌中信人少く、執跨中力人少く、貧賤中操人少く、文墨中確人少きは、洵に當世の不幸あり、然かく當世の不幸ありとは雖も、未た嘗て學界中識人を缺く一世の不幸なるよ若く者あらんや、今や學者自ら居る者、亦た多し、而して幾人が能く自家の識見を挺して、社會の提醒よ志すぞ、夫れ學者は清議の源なり、輿論の主なり、名教の支柱あり、今の學

者は、則ち輿論の狎客に非らざれば、清議の啞者たり、名教の傀儡たり、孰か然らすと謂ふ乎、遇々二三の新幟を樹て、舊見を排せんと試むる者無きよ非すと雖も、忽ち社會の反激に遭ひ、官を斥けられ、謗を破るに及ては、挫廢色を失す、是も亦た未た其の識見の確立せざるよ據るのみ、瑣氏の傳を見る者は、併せて鑒みさる可けんや。

國分青崖賛曰。

貧賤無操。富貴無德。武人無勇。學者無識。  
雷同相和。比周相得。滔滔流風。獨奈斯國。

## 瑣克拉的終

ソクラテス跋

世俗或は孔丘釋迦耶蘇ソクラテスを謂て四聖と爲す、然して言行を詳悉し得るは、獨りソクラテスあるのみ。但だ姑く傳ふる所に依りて較量すれば、ソは愛あれども、耶の若く愛あらずして、而して耶と同しく身を犠牲に供せるあり、慈悲忍辱なれども、釋の若く慈悲忍辱ならざして、而して釋と同しく民衆を濟度せんと務めらなり、溫潤含蓄の氣象あれども、孔丘の若く溫潤含蓄の氣象あらずして、而して孔丘と同しく道を學て倦まず、人を誨て厭はず、食を忘れ、樂みて以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らざるなり。然るに人の神として仰がるゝには、傳聞審な

らずして不可思議なる所の存在せんを要す、ソが他三氏の如く後世の尊拜敬禮する所と爲らざるは、豈に其の言行の詳悉し得らるゝが爲にあらざるや。孔や、釋や、耶や、設し能く之が言行を詳悉し得ば、又焉そソの如くなり、若くはソより降下するの恐あらざるを保すへけんや。而も尊拜敬禮は寧ろ時の流行に出て、之を享くるとて必しも深く稱すへしとせず、言行の詳悉し得らるゝ、ソの若く、而して後人の愛重して措かざるを猶ほソの若く、乃ち以てソの太た偉大なるを看るへきに非ずや。

三宅雄識

明治廿六年七月十一日印刷  
明治廿六年七月十四日發行

定價金拾二錢

版權登錄

編者

三宅雄識

發行者

大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

印刷者

杉原辨次郎

京橋區元數寄屋町四丁目二番地

印刷所

杉原活版所

京橋區元數寄屋町四丁目二番地



東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

太華山人著 富岡永洗書

# 太閤秀吉

全一冊和装  
密書入美本  
正價拾二錢  
郵税金四錢

擊鞋一度鞋をして旗を取り風雲に從て呼び奇策縱橫群雄撫  
視して日本六十餘州を巻舒する綿の如く雄心勃勃雷霆を吐し  
て朝鮮八道を蹂躪するの壯觀凡て是れ太華君得意の快筆を以  
て寫す殊に渠の微賤時代の冤罪を雪きて新なる太閤秀吉躍動  
す英雄の心事描きて火の如く潮の如し

紫山北村三郎君著 寫真石版眞蹟肖像挿入

# 維新三傑

全一冊和装  
正價拾二錢  
郵税金四錢

搏虎屠龍の手腕を以て、鎌倉以來七百年間の武政を打破り、王  
世復古の盛運を回して、經天緯地の偉業を成せるは維新の改  
革なり、此の改革を唱導し幹旋せしは西郷木戸、大久保の三  
傑なり、天下紛々として人心安からず、外夷頻りに來りて邊海  
騷しく、絶網解弛し、天下將々として大に亂れんとするに乘じ、一呼  
百應を衝破し、屢々死門關門を出入し、人生の辛酸を嘗め盡し  
て、竟に絶大の功を成す、三傑の名は今尚ほ世の譽れく記憶に  
存せるに非ずや、特に西郷氏は近世絶無の英雄にして、末路壯  
年の爲めに一命を捨てしと雖も、其の學實雄斷、安量の徳は、  
死後數拾年の今日尚ほ世人をして欽慕に耐へざるにせしむ、今少  
年文學第四編として、特に此の三傑の傳を叙す、三傑の生ひ立  
幼時の性質舉動志望材幹は勿論、其の傳を叙す、三傑の生ひ立  
存せり、少年諸君之を讀まば、躍如たる三傑の眞影に接して只  
だ自から志を奮ひ精神を勵ますに止まらず、又日本歴史上の  
大事業たる維新改革の顛末を知るべし、

德富蘇峯 志賀矧川兩君序文  
迎雪山君纂譯

# 三大草バーク

全一冊洋装  
正價金拾錢  
郵税金四錢

本書の滋味は殊に左の人々に大ならん  
●(一)十八世紀下半亞歐米の三大革命を知らんと欲する者  
●(二)人生行路の波瀾を學ばんと欲する者  
●(三)雄辯家たらんと欲する者  
●(四)巨人の腦髓を分拆して其の組織を知らんと欲する者  
●(五)至誠の活動力の顯象、及其の到點を知らんと欲する者

絹涯 萩原民吉君纂譯

# 英傑の典型

全一冊洋装  
正價金拾錢  
郵税金四錢

紛々たる明治界の英雄論を排して、顯はれ出でたるは、英傑之典型なり、一はハンパデンにして、一は則ちワシントン、共に是れ英雄獻身の義膽熱腸奴隸の臉に接吻し、天に仕へ義に殉するの大偉人、英米の革命はより流れ來る。炎塵漢々の時、江湖君子の心目を爽かにするものハ、英傑之典型なり、原文玉の如く、譯文亦水晶の如し。

角田音吉君著

# 水野越前守

全一冊洋装  
寸珍美本  
正價金拾錢  
郵税金四錢

徳川氏三百年の治世、上下恬熙奢侈遊惰に耽り、紀綱將々に廢せんとするに當たり、天保の大改革を禁じ淫を止め、上下の體を奪ひ、幕府の政綱を一振したるは老中水野忠邦の力なり、其の改革の急なる爲に、遊惰の俗に忌れ、謗議百出、終に職を去るも、其の施設の政略は皆天下後世をして、欣仰止まざらしむ、況や其在職の間幕府の盛衰汚隆に關する大事擧げて敢ふ可らず、水野忠邦は皆之に關す、故に忠邦一人の傳は徳川氏掉尾の重要歴史なり、水野忠邦を知り、天保弘化間の事變を知らんは欲する者は皆本書を讀ますんばあるべからざるなり

矢部五洲先生著

# 徳川家康

全一冊和装  
華僑密書入  
正價拾二錢  
郵税金四錢

英雄を論ずる誠に難し本書は是れ日本歴史の大立物たる徳川家康を捉へ來りて筆端湧き龍嘯く寛容海量の同情包濶變化の境遇等凡て社會に起れる事實の摺拾と深到深射の眼光を以て之を評論す本書は是れ英雄解剖論美文の粹議論の快讀者は直ちに至らむ

尾崎紅葉君著

# 俠黑兒

全一冊和装  
正價拾二錢  
郵税金四錢

紙に落ちたるは著者が美文、筆に染みたるは黒奴の熱淚、明月光冷かにして、芭蕉の蔭自から暗らく、瘴鬼の咳き、且つ舞ふの時、咽々海風に和して起る、西印度トやめいか島黒奴が不平の叫び、不俱戴天の白人種、渠等が肉を膾にして、鬻體の盃に飲まむといふ、唯此間至誠主恩を忘れざる、一個の俠黒兒あり、義膽鐵腸、死を見る天の如く、我性命を捧げて黒奴が不平暴動の犠牲となる、熱血熱淚の好物語、附録に輝きし『金時計』ハ、外人が奸黠を描きて、日本の好少年三郎某が、豪宕義俠の心肝に照さしむ、共に是れ炎暑憎眠の清涼劑、一讀すれば冷風心骨に沁み、再讀すれば奇幻絢爛なる筆墨の外、別に著者が主張する所あるを知らむ。

6/35

連山人 霧山人共選。

### 獨逸 六大家列傳

全一册洋裝  
正價金拾錢  
郵税金四錢

十九世紀今日の獨逸文學が其絢爛たる光彩を發つ所以のものに實に先輩六大家ありしを以てなり、先輩六大家といふ誰ぞ曰くクロツプストク、曰くウヰンランド、曰くレツシング、曰くヘルデル、曰くゲーテ、曰くシルレル。此編此六大家の傳を詳記して其性行才學一として漏す所ありしが如何なる性質を有し且如何なる發達を著したるを了知すべし

矢部五洲先生著

### ウエルリントン

全一册洋裝  
正價金拾錢  
郵税金四錢

歐洲の山川を震動したるナポレオンが滔天の武力を一擧に挫きたる英國古今無双の良將として貴族院内多數の議院を傾かし一擧英國政府許多の内閣員をして喜憂せしめたる大政治家としてウエルリントン公ウエスレーの名を世にせざるものは五洲にして雖一人もなほ此書は矢部五洲氏が絢爛の筆を以て此偉人の傳記を叙したるものにして其容貌動作言論叱咤の狀勢歸として其貴況を嗜るものにしてウエルカルトロの快戦の如きは叙し得て痛快淋漓たり荷も公一代の大業を知らんと欲するもの、必讀すべき好傳記なり快文字なり

原抱一庵主人著

### 拿破崙

全一册洋裝  
正價拾五錢  
郵税金四錢

絶世の巨人は譬ば彼の雷霆の如く其名聲は轟々然として世界に響くも其真形體に至ては渾焉として捕捉し易からず從來那翁を論ずるの書乏しからずと雖も多くは曖昧の裡に描叙し了りて其真相面目は本書の「所謂未だ覆面裡に蔽はれあるあり」北米の文傑ヘッドレイ氏公直の見平靜の識を以て縱横無盡に那翁を描叙品騰す列國の形勢那翁の戰軍軍法兵制其品行其徳性其伎倆其智能其幼時其死期叙し去り叙し來り評し去し評し來り筆端風生し地上雲起る其所論正直質實故に人の心に感ずる深くして切其描叙や明にして快故に偉人眼下に顯はれ來る抱一庵主人今之を譯して世人に紹介す主人が玲瓏の心胸透徹の彩筆世既に公評あり庶幾くはナポレオンボナパードの眞面目之より後大和民族の眼孔に映影し來たるを得ん歟。

70  
116

